

Title	高瀬弘一郎君学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.3 (1977. 10) ,p.106(332)- 109(335)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19771000-0106">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19771000-0106</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 彙報

高瀬弘一郎君学位請求論文審査要旨

### 「キリシタン時代の研究」

——とくに教会の政治的・経済的活動を中心に——

本論文は、日本教会の世俗的活動を通してキリシタン布教事業の特質を説明しようとする、著者の年来の研究成果を体系的に集めたものである。

キリシタン研究にはこれまでに多くの蓄積があるが、それらは当然のことながら専ら布教事業そのものを対象として進められてきた。しかし著者は、布教が地上に作られた教会によって行われるものである以上、世俗とのかかわりがあり、布教活動もその面から制約され影響されざるをえなかった筈であると考え、教会の世俗的側面を通してキリシタン布教を歴史の現実の中でとらえ直そうと試みている。そのために著者は、ローマのイエズス会古文書館を初めとする西欧の古文書館・図書館に赴いて自ら史料の探訪を行なった。従来のキリシタン研究の限界が、教会関係者の手で教会活動の一部として編纂された文献に基づいて行われてきたことに負うところが多いと認め、それらの編纂物に収録されなかった膨大な原史料群のうち有用な史料を求めようとしたのである。本論文はこのような一貫した視角と新しい史料とに基づいて

て書かれた、一応独立の一六篇の個別論文から成る重厚な研究である。

序論の三篇は、日本における布教が大航海時代のカトリック布教活動の一環として行われたことから付与されたその性格を、包括的に扱ったものである。すなわち、(1)「大航海時代イベリヤ両国の世界二分割征服論と日本」、(2)「大航海時代とキリシタン—宣教師の祖国意識を中心に—」、および(3)「キリシタンと統一権力」において、著者はキリシタン布教がローマ教皇から付与された世俗的、霊的專業を含む権利と義務とに基づいて行われたポルトガル、スペイン両王国の国家事業としての海外発展の一環であったことを力説する。そして異教世界の境界を定めた両国のデマルカシオンが東半球に言及するところがなかったため、日本を含む東洋についてはイベリヤ両国への帰属は、実績により力関係で処理された点に注目し、それが日本布教にあたった宣教師の祖国意識をたかめ、布教への情熱を一層かきたてた事実を指摘するとともに、一七世紀に入って教会内外の情勢の変化に伴い、イエズス会士の貿易のかかわりが深くなるにつれて精神的頹廢を招いたことを重視している。そしてこの貿易へのかかわりの深さは、一面において逸早く禁教の原則をかかげたわが国の統一政權に、教会との妥協を余儀なくさせたと同時に、反面でポルトガル貿易の重要性の減退が禁教の徹底を可能にする条件となったと説いている。

本論一三篇は、序論三篇のそのような論述を枠組として、教会

の政治的・経済的活動を新資料に基づいて詳細に掘り下げたものである。すなわち、まず(1)「キリシタン教会の経費」でイエズス会の日本布教に要した費用の量的推移をさぐった上、(2)「キリシタン教会の資産と負債」で全教会の貨幣資産と借入金の動向を辿って、資産額の固定化と借入金増加という傾向を確認し、つぎの(3)「キリシタン教会の資金調達について」ではその増大する借入金の内容を検討して、信徒の友好商人の融通から商業ベースでの借入れへの変化のあとを明らかにしている。

ついで(4)「キリシタン教会の経済基盤のあり方をめぐる教会内部の論議について」では、貿易収入を主たる財源として運営された教会財政の在り方に関する日本教会内部の諸見解を整理し、本国王・ローマ教皇からの援助の強化や土地収入の増強など、貿易偏重の制限を主張する多数意見を紹介しつつ、貿易収入そのものに對する否定的意見が殆んどみられなかったことに注目している。(5)「キリシタン時代、インドにおける日本イエズス会の資産について」は、論文(4)に現われた土地収入の内容を明らかにしたもので、ポルトガル領インドにおける日本教会の土地所有とそこからの収入額およびその使途を究明している。そして(6)「キリシタン教会の財務担当パードレについて」で、教会財政の衝にあたったプロクラドールの名簿を作製し、その地位が時とともに向上したことを指摘し、その職掌に含まれていた貿易仲介業務の拡大に日本布教の性格変化との関連を認め、進んで(7)「キリシタン宣教師の経済活動」で、この貿易仲介の実態を詳細に検討して、

とくに布教活動との関係を力説している。

著者はさらに(8)「キリシタン教会の貿易収入額について」において、貿易活動によって教会が得た利益額と利益率とを克明にさぐり、特別の事情のない限り、貿易収入が教会経費の三分の二乃至それ以上を賄っていた事実を確認している。(9)「キリシタン宣教師の非公認の商業活動について」は、既述のような教会そのものの貿易業務のほかに、イエズス会士が個人として行なった非公認の貿易斡旋や国内商業活動をとり上げ、事柄の性質上その実態は把握し難いが、総会長・巡察師の瀕繁な禁止令が出されているところから、初期以来終末期にいたるまで絶えることなく続けられたと認め、給付金・補給物資の不足がちな各布教機関はそれによって独自に資金を補充し、救貧事業などにその収益を活用した事実がある反面、清貧を旨とする修道精神の墮落にも結びつきがちであったことを述べている。

以上の九篇で教会の経済活動に関する検討を終えた著者は、転じて(10)「一七世紀初頭におけるスペイン貿易について」において、研究史上軽視されてきたスペインの日本貿易を、スペイン系托鉢修道会士の布教活動との関連で取上げ、ポルトガルと異ったスペインの貿易仕法を教会資料によって明らかにしつつ、両者の競合が徳川幕府の貿易政策に利用されたことを指摘している。つづく(11)「教会史料を通してみた系割符」は、わが国近世史上の重要な研究課題として論じ続けられてきた系割符制度の成立とその意義を、教会文書から再検討したものである。そして著者は従来

の解釈には糸割符とパンカダとの混同があり、パンカダはポルトガルの日本貿易で初期から採られていた一括取引の仕法であって糸割符とはもともと別個のものであることを明らかにし、また糸割符商人が買入価格を一方的に決定する権利を得たとする通説も事実を反することを指摘した上で、糸割符の制定は輸入生糸を特定の商人群に独占的に買入させる国内政策として行われたと論じている。このように糸割符制度を幕府の禁教・貿易政策のなかで理解する通説を却けた著者は、⑫「江戸幕府のキリシタン禁教政策と教会財政」で、教会の財源を断つ目的で貿易政策が打出される時期は一六二六年からであることを述べ、幕府がこの措置に踏み切るに至った条件として、シナ、オランダ貿易の拡大、ポルトガル商人の経済力の減退を挙げ、ポルトガル貿易の喪失を伴う禁教の徹底を実行するだけの状況がこの時期までに形成されていたと説いている。

最終論文である⑬「キリシタン宣教師の軍事計画」は、大航海時代の布教がイペリヤ両国の国家事業の一部であり、かつ両国間で異教世界を二分割して、夫々の領域における征服・統治・貿易ならびに布教を独占することがローマ教皇によって正当化されていたという序論の所説を前提として、宣教師の間で行われた日本およびシナに対する武力征服論またはそれに類する見解を紹介し吟味したものである。そして、たとえ部分的にであれ、武力征服論を内包したキリシタン布教事業の性格が、オランダ側によって一層誇張されることによって、江戸幕府の禁教政策の一因となっ

たのみならず、江戸時代におけるキリシタン邪教思想の浸潤にも投影していると論じている。

概略右のような構成をもつ本論文の研究成果は、従来のキリシタン史研究が殆んど全く触れることのなかった分野を独力で開拓したものであり、特に既刊の史料集・史書に未収録の原史料の縦横の駆使によって、キリシタン研究に新生面をひらいた劃期的な業績をなしている。著者の精力的な作業とすぐれた語学力によって、多くの未知の史実が紹介され、通説の謬りが訂正されたことは枚挙にいとまがない。今後のキリシタン研究は、著者の業績を無視することができず、最近の宗門史研究において未刊の原史料に遡ることが目立つが、著者の開拓した新しい側面はキリシタン史研究そのものの方向づけにかかわる有力な寄与をなすものである。さらに重要な点は、著者の業績が単にキリシタン史の域だけにとどまらず、一六・一七世紀の日本史研究に対する大いなる寄与であることにある。生糸貿易の利益率、長崎教会領化の真相や糸割符制の意義などは、その主要な一端にすぎない。

然しながら、本論文によって著者の研究が完成されたわけではない。著者の主たる関心がそこにはないとしても、従来明らかにされてきた布教史との関連づけはより具体的に検討される必要がある。例えていえば、日本における布教原理であった「適応主義」のなかでの日本人会員の問題と日本人からの喜捨・援助という財政問題との関連の如きものである。また本論文が取上げている諸史実についても、展開や検討の余地が残されていると思われる。

その一は国内史との関連づけである。例えば金貿易の問題は、たとえそれが教会に生糸貿易ほどの利益をもたらさなかったとしても、国内史との関係を考えれば、一層立入った実態の解明が望ましいし、日本教会のインドにおける土地所有についても、国内における教会領の問題との関連からいって、その実態の一層の追求が望ましい。第二に著者の問題設定にそって、日本教会の諸活動――聖俗両面を含めての――を、イベリヤ両国の東洋における活動全般の動向のうちで取扱うという雄大な課題が今後に残されている。差し当りポルトガルの東洋貿易のなかに日本教会の貿易活動を明確に位置づけることが必要であろう。

これを要するに、独自の視点から探訪した尨大な原史料を丹念に検討して成った本論文は、キリシタン時代の研究に新生面を拓いた実証的業績として、優に国際的評価にもたえるものであり、その大成は期して俟つべきものである。これだけの成果を挙げた本論文の著者は、文学博士の称号を帯びるに充分の資格あるものと判定する。

昭和五二年三月十六日

審査担当者

慶応義塾大学文学部教授・文学博士

清水潤三

彙報

慶応義塾大学文学部教授

中井信彦

慶応義塾大学大学院文学研究科講師・文学博士

岩生成一

慶応義塾大学大学院文学研究科講師

吉田小五郎